

白い器

遠山 よう子

私はその日文芸サークルの当番だった
行徳の駅を降りて改札を出たとき
目にとびこんできた

ガード下の犬とおばさん

犬はあきらかに弱っていた
おばさんがビスケットのようなものを
とり出して犬の前に置くが
見向きもしない
首輪はなかった

道ゆく人はおやつというふう
のぞきこむが

足速に立ち去る

おばさんも通りすがりなのだろう

時々時計を見ている

だれが置いたのか

発泡スチロールの白い器に

水が入っていた

今、十時十分前

文芸サークルの開始は十時

私はこれから机や椅子を

並べなければならぬ

その場をはなれた

振り向くとおばさんは

犬の背中をさすっていた

サークルの間中

犬とおばさんを何度も思った

窓の外には夏の陽が

容赦ない

まだ犬はいるだろうか

誘いをことわって

駅に急いだ

犬はいなかった

白い器もなかった

もしいたら

私はどうしていただろう

私をしぼるものはない

犬がいなくてホツとしたような気持ち

少しあったような気がする

もう三十年以上も前のことなのに

犬は私の中に生きつづけ

何かをしきりに問いつづけるのだ